

農と食の未来を考える第1弾



ドキュメンタリー
大平農園401年目の四季
制作バク 2018年

埼玉会館（さいたま市）

2020年1月13日（月・祝日）
14:00～16:00（13:30開場）

東京都世田谷区、都会の真ん中で連綿と続けられてきた農の営み。400年続く「大平農園」は、1968年からは有機農業のパイオニアとして、農薬を一切使わない安全な食料を地域の人々に届けてきた。農園の運営はきわめてユニーク。消費者は会員になって週一で定期購入し、農作業も手伝う、農家と消費者が互いに支え合う「提携」というシステム。

母屋を囲むケヤキの大木。春に芽吹いた葉が、夏の風にそよぎ、秋に散った落ち葉は集めて堆肥にされ、農地に鋤き込まれ土に還る。自然の力をいっぱい引き出した農園にやって来るのは蝶や昆虫、鳥たちだけではない。消費者や有機農業を学びたい人、悩める若者も引き付ける。高齢になった農園主と、この都会のオアシスを守りたいと集う人々の一年を追ったドキュメンタリー。





大平農園 401年目の 四季



企画・撮影・編集 森信潤子
音楽 トウヤマタケオ
「E.V.A.」徳澤青弦
編集協力 半谷守廣・望月博文

デザイン 山本祐衣
協力 大平農園・若葉会
プロデューサー 山本常夫

農と食の現在と未来を考える

都市農業は単に食料を生産供給するだけではない。今や希少となった都会の農的生態系は、空気を浄化し、さまざまな生き物の住処となり、魅力的な景観をつくりだし、人々の憩いの場や子どもたちの学習の場となるなど、多彩な機能を担っている。

一方で、40パーセントを下回る日本の食料自給率。巨大台風、熱波、干ばつなどの自然災害の多発、遺伝子組み換え食品、ガンや発達障害の危険性が指摘される農薬、農家の高齢化、農村の衰退と、日本の農業を取り巻く状況は厳しい。

東京にあって有機農産物を地産地消で提供する大平農園は、地球にやさしい理想的な農業を実践してきた。その歴史が積み重なる中で、農園主も、会員として支えてきた消費者も高齢に。この農園の未来は……。

食の安全や安定供給、環境保全が問われている今、食を守るのは誰なのか、持続可能な農業とは何なのか、私たちにできることは何なのか。『大平農園の401年目の春』は、自然の営みに誠実に向き合い、大地からの恵みを生み出す人々の、過去を想い未来を見つめるまなざしを追い、私たちに静かに語りかける。

1月13日 (月・祝日)

14:00～16:00 (13:30開場)

埼玉会館 4A会議室

(さいたま市浦和区高砂3-1-4)

JR 浦和駅 西口 徒歩6分

料金 一般1,000円 学生800円

定員 50名 (当日先着順)



企画・運営: さきたま有機びと
共催: NPO法人日本有機農業研究会

問い合わせ先: yukibio-sakitama@yahoo.co.jp